

日本出版クラブ「洋書の森」主催
翻訳者のためのウィークエンド スキルアップ講座 第13回



宮脇教室3限目

「基本にかえれ」

Back to the basics!

訳語は自分で考える！



待望の宮脇教室3限目のご案内です！ 前回まで小説の訳し方を取り上げてきましたが、今回は基本に立ち返り、訳語の選び方です。

みなさんは辞書にどのくらいの重きを置いていますか？ 辞書の訳語ばかり並べていると、文体の統一感がなくなり、途中で語り手が変わっているような印象を与えることも——そうならないためには、自分の頭で訳語をひねり出すことが必須。基本でありながら本質的なこの訳語選びは、初心者も、キャリアのある翻訳者も、日々悩んでいるテーマでしょう。その秘訣を、ここであらためて先生に伝授していただきます。

今回の添削課題は、あえて作家の文章ではなく、ある作品に掲載された一般女性の書いた手紙を出題します。さて、辞書に頼りすぎず、女性のキャラクターが途中で別人に変わることなく訳し切れるでしょうか。レッツ・チャレンジ！

申し込み順60名限定の人気の連続講座です。講座に続き、毎年恒例のクリスマス会も開催します。どちらも申し込みは、お早めに！

◆ 参加要項 ◆

日 時

2014年12月13日（土） 15：00～17：00（受付開始14：30）

講 師

宮 脇 孝 雄 氏（翻訳家／随筆家）

会 場

日本出版クラブ会館・セミナールーム
（新宿区袋町6番地 都営大江戸線牛込神楽坂駅より徒歩2分）
<http://www.shuppan-club.jp/>

参加費

講座 2,100円

定 員

60名（申込順、定員になり次第締切らせていただきます）
「洋書の森」未会員の皆さまもご参加になれます

講座終了後は毎年恒例のクリスマス会（参加費5200円・飲食代を含む）を講師同席のもと17時30分より、会場「鳳凰の間」にて開催いたします

参加ご希望の方は同時にお申込みください

お申込み・お問合せ

お名前・洋書の森会員番号（会員の方）・ご連絡先電話番号、アドレス・参加人数を明記して
“12/13(講座のみ or 講座・クリスマス会とも or クリスマス会のみ)参加希望、と以下アドレス宛てにE-mailにて送信してください

(財)日本出版クラブ内 「洋書の森」事務局
E-Mail : yousho@shuppan-club.jp TEL 03(3260)5271

◆講義内容◆

今回は「基本にもどれ」というテーマで、なんの仕掛けもないごく普通の英文を取りあげます。課題文は、一般人が手紙で送ってきた不思議な体験談を集めた *True Ghost Stories* (Vivienne Rae-Ellis 編、Faber & Faber 1990) という本から採ったもので、書き手は普通の主婦です。ここでいう「基本」とは、そういう人物が書いた英語の文章を、そういう人物が書きそうな日本語に置き換えることだと考えてください。うまくできないと、訳文が不自然になり、多重人格の人間が書いたような文章になりがちです。既存の訳本からそんな失敗例もご紹介しますが、そうならないためのノウハウを今回は大公開します。

短い文章ですので、全文を訳してみてください。訳文の添削を希望される方は、12月1日(月)15:00までに「洋書の森」事務局へ届くようにメールでお送りください。いつものように添削答案は氏名を消し、疑問の残る箇所には傍点を引いて当日の講義時間に配布いたします。「たいへんよくできました」を目指してがんばってください。

課題文

Mrs Margaret Offen lives in Tyneside. She wrote a moving account of her own experience.

This is a true story of a very real ghost. But I must start this tale many years before the incident occurred—in fact, when this ghost was very much alive.

It all started when I met my future husband—a widower of two years with two very small children. His wife had died tragically, leaving him with a little girl of five years and a small boy of two years, and her father of eighty years, who had lived with them since their marriage some ten years previously.

Before we married, I had visited the house many times as we often took the children on outings or I just looked after them while their father attended business meetings.

I always had great compassion for the frail old man who not only had to cope with his daughter's death, but also with the high spirits of these two healthy youngsters.

I did notice that he had a special affection for the little boy. He cared for him through the day and kept saying what a lovely nature the child had.

Two years later, he gradually grew much frailer. One cold winter's day he died, quite peacefully, in the small bedroom he had always occupied.

We married in the following autumn, and the little boy, now six years old, occupied the bedroom his grandfather had always used.

Many years later, we had all been out late to a church social and on returning home we prepared for bed.

The boy, now a big lad of sixteen or thereabouts, went to bed first. I glanced at the clock before I checked that all the lights were out: it was exactly 12.20 a.m. I opened the door of the small bedroom to turn out the light—and beside the window was the figure of a white-haired old man. There was the familiar waistcoat and shirt-sleeves. He was leaning against the window sill and looking lovingly at the sleeping boy. It only seemed to be for a second, but it was all very real and not in the least frightening.

I told my husband about the incident next morning as we got ready for church. I thought he would laugh incredulously, but he did not do anything, except ask what date it was. It was 19 February, ten years exactly since the old man had passed away.

He had made the journey back to see that everything was still all right, and when he saw his beloved grandson was happy he went away contented—and so far he has never come back.

◆講師略歴◆

宮脇孝雄（みやわき たかお）

1954年2月14日、高知県土佐市生まれ。高知県は東京都より面積が広いが、人口は杉並区より少なく、しかもその八割が高知市に集中しているため、県庁所在地を少し離れると一キロ四方自分以外誰もいないという場所がよくあり、少年時代から人間ではなく昆虫や鳥や魚と戯れることを好んだ。実家の右隣はお菓子屋、左隣は本屋で、字が読めるようになるとお菓子を食べながら本を読む生活を満喫するようになる。実家は映画館経営で、本を読んでいないときは映画館に入り浸る小学生だった。大学時代に参加した推理小説サークル（ワセダミステリクラブ、略称WMC）の先輩、大井良純氏（翻訳家、故人）に小鷹信光氏と菅野罔彦氏（早川書房編集者のちに編集長、故人）を紹介していただいて、この道に入る。もともとはSFファンだったが、WMCで折原一氏（のちの作家）から古本屋巡りの手ほどきを受けたり、入れ違いに卒業したM氏（のちの作家、北村薫氏）が部室に残していったエラリー・クイーンや鮎川哲也を読むうちにミステリに目覚める。大学二年のとき「ミステリ マガジン」に短篇を訳したときにもらったのが最初の原稿料、その四年後に単行本（早川ポケミス、ジョイス・ポーター著『殺人つきパック旅行』）を出してもらったときに振り込まれたのが最初の印税。以後、四十年ほど売文生活を送る。

主な著書

『書齋の旅人－イギリス・ミステリ歴史散歩』（1991年）早川書房、『書齋の料理人－翻訳家はキッチンで…』（1991年）世界文化社、「『煮たり焼いたり炒めたり』早川文庫、『翻訳家の書齋－〈想像力〉が働く仕事場』（1997年）研究社、『パーパーバック探訪－英米文化のエッセンス』（1998年）アルク、『翻訳の基本－原文どおりに日本語に』（2000年）研究社、『続・翻訳の基本』（2010年）研究社、『英和翻訳基本辞典』（2013年）研究社。

主な訳書

トーマス・トンプスン 『血と金 ある富豪の愛と執念』 小鷹信光共訳、パシフィカ、1977年、ジョイス・ポーター 『殺人つきパック旅行』 早川書房、1978年、リチャード・スターク 『悪党パーカー 殺戮の月』 早川書房、1979年、コリン・ウィルコックス、ビル・プロンジーニ 『依頼人は三度襲われる』 文藝春秋〈文春文庫〉、1979年、リチャード・エイヴァリー 『タンタロスの輪 コンコラッド消耗部隊』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1980年、ウィルコックス 『容疑者は雨に消える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、ウィルコックス 『女友達は影に怯える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、テランス・ディックス 『盗ま

れた名画をさがせ』 ティビーエス・ブリタニカ(ベーカー街少年探偵団)、1981年、M.S. バリー 『サイモンと魔女』 ティビーエス・ブリタニカ、1981年、グレゴリー・ベンフォード、ゴードン・エクランド 『もし星が神ならば』 早川書房のち文庫、1981年、ウィリアム・ディール 『シャーキーズ・マシーン』 角川書店、1982年、テリー・カー 『聖堂都市サーク』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1984年、ジェイムズ・マクルーア 『小さな警官』 早川書房、1984年、アーサー・ライアンズ 『ハード・トレード』 河出書房新社 のち文庫、1985年、W・ケリー、E・W・ウォーレス 『目撃者 刑事ジョン・ブック』 角川書店〈角川文庫〉、1985年、クライヴ・バーカー 『ミッドナイト・ミートトレイン』 集英社〈集英社文庫〉、1987年、ジョン・コーンウェル 『地に戻る者ーイギリス田園殺人事件』 早川書房、1988年、フリーマントル 『名門ホテル乗っ取り工作』 新潮社〈新潮文庫〉、1989年、パトリック・マグラア 『血のささやき、水つつぶやき』 河出書房新社、1989年、ジェーン・デンティンガー 『そして殺人の幕が上がる』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1991年、ヨゼフ・シュクヴォレツキー 『ノックス師に捧げる10の犯罪』 宮脇裕子共訳、早川書房、1991年、ディーン・R・クーンツ 『ストレンジャーズ』 文藝春秋〈文春文庫〉、1991年、デンティンガー 『誰も批評家を愛せない』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1992年、パトリシア・ハイスミス 『女嫌いのための小品集』 河出書房新社〈河出文庫〉、1993年、イアン・マキューアン 『イノセント』 早川書房 のち文庫、1993年、ジェフ・ニコルソン 『食物連鎖』 早川書房、1995年、ジョン・ダニング 『死の蔵書』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1996年、C・W・ニコル 『スケッチの音』 エム・ピー・シー、1999年、メアリー・M. モーリス 『逃避行』 集英社〈集英社文庫〉、1999年、ウィリアム・J. パーマー 『文豪ディケンズと倒錯の館』 新潮社〈新潮文庫〉、2001年、ドロシー・L・セイヤーズ 『顔のない男ーピーター卿の事件簿〈2〉』 東京創元社〈創元推理文庫〉、2001年、グラディス・ミッチェル 『ソルトマーシュの殺人』 国書刊行会、2002年、ハイスミス 『回転する世界の静止点ー初期短篇集1938-1949』 河出書房新社、2005年、ハイスミス 『目には見えない何かー中後期短篇集1952-1982』 河出書房新社、2005年、マシュー・ニール 『英国紳士、エデンへ行く』 早川書房、2007年。